

# 《新刊紹介》

清水文雄先生著

## 『王朝女流文学史』

清水文雄先生の「王朝女流文学史」が古川書房から発行された。

本書は、序説が三節からなり、一「断絶と架橋」では、王朝の女性が、「閉ざされた運命」の中にあつて、「みずからの足下に、どうしようもない運命的な断絶の谷間を意識」したとき、「その谷間を超える」「架橋」という課題を、「文学」との出会いによつて解決の方向を見いだしたことが説かれている。

この文学という「夢の浮橋」が「自己救済」の道となり、「人生の灯」ともなりえた裏には、「その虹のような虚構の懸橋を永遠に光彩あるものとさせる真実の人生があつた」と指摘されている。

二「『ものあはれ』をしる」では、「『ものあはれ』を体験を通して感得すること」だと結論され、「しる」の中にすでに「共感」が含まれていること、この共感が「王朝の生

活協同体の連帯のモラル」となつていくことを説かれ、「『ものあはれ』を生み出した精神が、そのまま王朝女流文学を生み出した精神でもあつた」と明言されている。

三「女流作家の誕生」では、その誕生の理由として、(1)家系と家庭教育、(2)文学サロンとしての後宮、(3)平仮名の自由駆使、(4)自己救済としての文学の発見、(5)批評精神の体得の五項目をあげて説明されている。

第一章「小野小町」では、「小町の創造した芸術の秘密は、『やむごとなき人』への思慕を契機として詠まれた彼女の歌、とくに夢の歌の表象を吟味することによつてしか、探り出すことはできない」とされて、彼女の夢の歌を「いわば、『かぎりなき思ひ』が、その夢のなかに、みずからを『花』とひらいて見せる『みやび』の秘儀」であつたと解明されている。

第二章「右大将道綱母」では、自らの体験を「日記」として記録することによつて、「自己の生を持續の相においてとらえ直」し、「物はかなさ」の深淵を超える道を見いだしたことが述べられている。

第三章「和泉式部」では、彼女の文学を、「愛」の純粹性と「その表現」の特異性という二点からとらえられて、「哀愁に彩られた華艶」がその文学の色調であつたとされている。「自分で自分の心の姿を見て歌つたような」表現の特異性、「恐ろしいばかりの孤独の深淵」に立ちながら、和泉の「愛」が、「情念としての純粹度のきわめて高い」ものであつたがゆえに、「自己表出の正確を求めて、おのづからに難解な詠みぶり」とならざるをえなかつたことなどが鋭く示される。「和泉式部日記」については彼女と帥の宮との間に存在した三つの条件についてふれられ、そのことによつて、「愛の詩人和泉式部の文学世界が、そのまきにあるべき極限に達したのである」と説かれている。

第四章の「菅原孝標女」では、「『更級日記』の表象をたよとして」「彼女の見た夢を主たる手がかりとして」孝標女の生涯を跡づけられている。「更級日記」の美しさは、「夢」へのあこがれの姿勢の美しさである

と指摘され、その「夢」をこまかく吟味されながら、それが微妙に変化するさまがあざやかにとらえられている。

第五章「式子内親王」では、「内親王の魂の原郷」を、その伝記的事実と歌の考察によつて、「十年に及ぶ齋院生活のなか」の、王朝文学の伝統そのもの」であつたと指摘され、内親王の歌にみられる「艶」は、「王朝的な『あはれ』の最後の燃焼の姿」であつたと説かれている。

「結語」では、かくして「文学史のバトンは、女房の手から、隠者の手に渡され」、隠者が「女房文学の『あはれ』の伝統を身をもつて伝えひらく美の使徒となりえたのである」と結ばれている。本書は、先生の長年のご研究が、詩のような文章によつて、明快に、含蓄深く説かれていて、非常に示唆深い。

(昭和47年5月10日、古川書房刊、B6判  
一九七ページ、六五〇円)

(安宗伸郎)